

民族と国家の相克から世界社会・地球社会へ

——関東社会学会2007年大会第3部会での報告と議論をふまえて——

庄司 興吉

第3部会は「人種・国家」と題されていたが、「民族・国家」が正しい。5つの報告があり、それぞれの報告のあと簡単なやりとりが行われ、最後に30分ほど総括討論を行った。5つの報告のうち3つは、いわばナショナリズムの歴史的展開に関わるものである。宮崎友子の第4報告「ネイションの平等的価値と保護主義への移行：19世紀末フランスにおける外国人問題から」は、19世紀末フランスの外国人問題を取り上げ、革命の歴史をつうじて平等と参加の内包を獲得した Nation の概念が、外国人労働者の出現に直面して排除的保守的な意味を帯びていく過程を追っている。新倉貴仁の第2報告「ネーションとステートとの亡霊の関係」は、ネーションとステートとの（相互）包摂的な関係が、近代史の展開とともに対抗的關係に転じ、やがて互いにとってそれぞれが「亡霊」となるような関係になってきたことを論ずる。ネーションがステートを憑依し、ステートがネーションを憑依するような関係性は、「国民国家の構築性」を暴き出してきたばかりでなく、新たな「他者性」を浮かび上がらせてきた。本田量久の第3報告「世界的リスク、世界的連帯、コスモポリタン・デモクラシー」は、考えようによっては、この他者性を「世界的リスク」と受け止め、それに対処する「世界的連帯」を獲得するために、「コスモポリタン・デモクラシー」を模索しているものとも取れる。高野麻子の第1報告「指紋法による身体の管理：日本における指紋法の需要と目的をめぐって」が指摘する「自発的認証」による個人の国家からの解放も、福田友子の第5報告「移民企業家のトランスナショナルなネットワーク形成」が伝える「エスニック・ビジネス」の生々しさも、民族と国家をめぐり、それらを越えて、何か世界的地球的なものに向かっている現代史の、したたるような軌跡を示しているのではないかと。